

「龍に成る」

井上 聖司

登場人物

青柳龍也 (14) 主人公

(20)

(21)

小浜燈馬 (14) プロ棋士。龍也にいじめられていた。

(21)

美川慶 (21) 龍也の幼馴染。龍也と同じく青杉大学在学中。

青柳幸恵 (46) 龍也の母。

(47)

雪竹充 (24) 新宗社の編集者。

今村和也 (21) ジュブナイルロックグランプリのボーカル。

立花 (55) 将棋連盟専務。

受付 (43) 女。関西将棋会館事務員

棋士 A・B・C・D・E

生徒 A・B

店員

ファン A・B

記者 A・B

受付男・女

○新木場スタジオコースト・外観

新木場スタジオコースト。

入り口には、「ジューブナイルロック」

と書かれた大きな看板がたっている。

○同・会場内

ざわついている会場。ステージは暗転中である。

MCがスポットライトを浴びて登場する。

MC「さーて皆さんお待ちかね。本日メインの登場です。青杉学園4年生！ 就職なんてくそくらえ！ ハートに響くロックでグランプリを掴んだのは、こいつらだ！」

派手な音楽とともに4人組のバンドが姿をあらわす。

一旦音が止まり、ロン毛のボーカル、今村和也（21）にスポットライトがあたる。

今村「俺らみたいな学生でも、夢をつかめる

って事を証明していきます。聴いて下さい、

『ヒカリノサキニ』」

観客の歓声に包まれる会場。

その中でしかめっ面をした青柳龍也

(21)と、楽しそうなヒョロリと背

の高い男、美川慶(21)がいる。

龍也「(苛立ち)くそだせえ」

後ろを振り向くと、後ろの観客にぶつかる。

どけよとメンチを切ると、ぶつかった

客は大男で、龍也をギロリと睨み返す。

龍也「す、すいません」

○タイトル『龍に成る』

○津田沼駅・外観(夕)

電車がホームへ入ってくる。

○同・改札(夕)

龍也と慶、改札を抜けてくる。

そのまま二人で歩き出す。

慶「いんやー俺らもグランプリ取ってりや、二人であそこでライブしてたのか」

龍也「別にあそこでライブする事に、そこま
で意味はねえよ」

慶「またそんな事いつて。来年また狙っ
ちゃう？」

龍也「狙わねえよ。売れないCDに歌込める
より、就職した方が、よっぽど効率的だと
気づいた」

一瞬悲しげな慶。

慶「そうだね！ たっちゃんは歌声も最高だ
けど、それ以外もできちゃうからね。才
能の宝箱や」

いちいちジェスチャーが大きい慶。
すると龍也の背後から、手に持ってい
るノートに夢中な小柄な男が龍也にぶ
つかる。

小浜燈馬（21）である。

龍也「うおっ」

燈馬「すみませ…」

一瞬の沈黙の後、にやりとする龍也と、
恐怖に慄く燈馬。

慶「うわ！ レアキャラ小浜くんじゃん！」

龍也「よう、小浜。久しぶりじゃん」

燈馬「あ、あ、すみませんぶりです。ああ

あ！」

龍也「うるせえよ。何生意気にぶつかったり

しちゃってんの？」

燈馬「（何度も頭を下げながら）すみません、

本当にすみません」

龍也「きも。5年ぶりぐらいか？」

燈馬「そうですね」

慶「小浜くん高校すぐ辞めて、引きこもって
るって聞いてたけど違うんだ」

うつむく燈馬。

龍也「（どつきながら）なんか言えよ」

燈馬「（大きな声で）す、すみません。今は
外に出たりします」

慶「今何してんの？」

燈馬の身なりを一通り見る龍也。

燈馬「（しゃべりだそうとする）」

龍也「絶賛落ちこぼれ中っぽいね、相変わら
ず」

笑う龍也と慶。

燈馬「すいません。じゃあまた」

早足で歩き出そうとする燈馬。

龍也「ちよつと待てよ」

龍也が燈馬の首襟を掴んで引つ張ると、
手に持っていたノートを落とす燈馬。
急いでノートを拾おうとする燈馬の首
襟を引き戻し、龍也がノートを踏みつ
ける。

燈馬「あ！」

慶が「あーあ」といった表情をしてい
る。

龍也「お前何勝手に帰ろうとしてんだよ。ま
だぶつかった謝罪がちゃんと終わってない
だろ」

燈馬「ごめんなさい、謝ります、謝りますの

で、ノートを！」

今にも泣きそうな燈馬。

龍也が踏みつけているノートを見つめる。

× × ×

(フラッシュ)

中学校の教室で、燈馬のノートを踏みつけている龍也(14)と、跪いて泣きそうな燈馬(14)

× × ×

龍也「お前まさか」

ノートを拾う龍也。

燈馬「あ！」

ノートを開いて笑い出す龍也。

龍也「まじかよ！ 見ろよ慶」

龍也、慶にノートを見せる。

ノートには将棋の事がびっしりと書き込まれていて、汚い。

龍也「まだお前将棋とかやってんの。しかもこんなびっしり」

燈馬「返してください」

龍也「こんな暇あるなら学校行こうよ。仕事しようよ。頼むから」

笑う龍也と慶、うつむく燈馬。

龍也「マジで親泣いてるだろ。趣味持っていないのは、本業があるやつだけだよ？ わかる？」

何かをこらえている燈馬。

龍也「お前なんの為に生きてんの。まじウケるわ」

ノートを投げ捨てる龍也。

龍也「じゃあな」

帰り出す龍也と慶。

燈馬（声）「しよ、将棋！」

驚いて振り返る龍也と慶。

そこには意を決した表情で燈馬が龍也を見ている。

龍也「は？」

龍也に睨まれて、一瞬ひるむ燈馬。しかし、再び龍也の目を見て

燈馬「僕の生きている意味！」

少しの沈黙の後、笑い出す龍也と慶。

そして急に真顔になる龍也。

龍也「黙れクズ」

苛立った表情で歩き出す龍也。

その後を慶が追う。

燈馬は息を切らしている。

○閑静な住宅街（夜）

人気のない住宅街の道路脇には桜が咲いている。

すでに満開の時期はすぎ、散りかけている。

○青柳家・外観（夜）

築20年程の3階建てアパート。

龍也が3階の自宅扉をあけている。

○同・玄関（夜）

龍也が入ってくる。

リビングの電気が点いている。
靴を脱ぎ、すぐに靴下も脱ぐ龍也。
母親のサンダルの隣に綺麗に靴を並べて、リビングへむかう。

○同・リビング（夜）

龍也の母、幸恵（４７）が料理をしている。

幸恵「おかえり」

龍也「ただいま」

狭いキッチンの冷蔵庫からお茶を取り出す龍也。お茶がほとんど入っていない。

龍也「お茶ねえじゃん」

幸恵「さっき沸かしたのがあるから、それ」
野菜を切りながら包丁でやかんを指す幸恵。

龍也「危ねえよ」

幸恵「大丈夫よ、切れたって血がでるだけなんだから」

お茶を注ぎながらカレンダーを見る龍也。

今日までの日付にバツ印がされてある。

20日の欄に、『母さん 病院』と書かれてある。

龍也「母さんの病院の日明後日かぁ」

母「そう。午前中にちやちやっ行ってきちゃう」

龍也「最近は落ち着いてるし、問題なさそうだな。元気すぎてうんざりだし」

母「何よその言い草。いつぽっくり逝くか分からないわよ」

龍也、お茶を飲み干し、

龍也「うるせえよ。明後日はバイトについて行けないから、検診終わったら連絡してよ。

メールでいいから」

幸恵「別にいいじゃない帰ってからで」

龍也「まあそうだな」

幸恵「お風呂湧いてるわよ」

龍也「じゃあ先に風呂入ってくるわ」

部屋を出ようとする龍也。

幸恵「あ、そうだ。新宗社の方から電話があったわよ」

龍也「なんて？」

幸恵「明日からのバイトについて話があるって」

龍也「危ねえな。それ早く言えよ」

幸恵「あら、これでも早く言ったほうよ」

龍也「くそばばあ」

早足で部屋を出て行く龍也。

○同・龍也の部屋（夜）

龍也が立って、家の子機から電話をかけている。

龍也「明日から4日間大阪ですか！？」

電話の相手は新宗社の編集、雪竹

（24）である。

雪竹（声）「そうなんだよね。急で申し訳ない。出版業界ってこういう事ばかりだから」

龍也「はあ。密着取材する相手って誰なんですか？」

雪竹「知ってるかなあ。小浜燈馬っていうプ

ロー」

龍也「（かぶせて）小浜燈馬！？」

雪竹「お、知ってた？」

龍也「い、いや…」

雪竹「じゃあ話は早い。その人に3日間密着

だから。調べられる事は調べといて」

龍也「あの、これって」

雪竹「じゃあ明日の9時に待ってるね」

龍也「あ、ちよつと」

電話はすでに切れている。

龍也「くそっ！」

急いでパソコンの電源をいれる龍也。

パソコンの立ち上がる時間が待てず、

スマホで『小浜燈馬』と調べる。

すると『小浜4段、無敗記録更新か』

というページが出てくる。

燈馬の写真が載っている。

龍也「まじかよ…」

○千代田区のオフィス街（朝）

高層ビルが立ち並んでいる。

○新宗社・外観（朝）

大きなビルの中にリュックを背負った龍也が入っていく。

ビルの入り口には『SHINSHUSYA』と書いてある。

○同・編集部（朝）

ポーンとエレベーターの機械音がする。エレベーターの扉が開くと龍也がいる。フロアではたくさんの社員がデスクワークをしている。散らかったデスクに座っている小太りの男、雪竹充（24）が龍也を見るなり、駆け寄ってくる。

雪竹「青柳くん！」

龍也「お久しぶりです」

雪竹「企業説明会ぶりか」

龍也「そうですね」

なぜか大笑いしながら龍也の肩をガシガシと叩く雪竹。

愛想笑いをしながら、雪竹の首襟に付いているフケを見て、ギョツとする龍也。

雪竹の隣のデスクに案内される龍也。

雪竹「ここが青柳くんのデスク。とりあえず座って」

龍也「はい」

龍也と雪竹が各々デスクに座る。

雪竹「じゃあ、早速だけど取材の話ね」

龍也「はい」

ガサゴソとデスク横のダンボールの中から漫画雑誌を取り出し、開いて龍也の前に置く。

開いている先は『王手必勝』というマンガの特集ページである。

雪竹「王手必勝っていうマンガ知ってる？」

ヤンアスで連載してるんだけど」

龍也「はい。出てる分は全巻読みました」

雪竹「さっすが。その王手必勝の特集ペー

ジで、今ノリにノッてる若手棋士である小

浜棋士の密着記事を掲載するってわけ」

龍也「なるほど」

雪竹「3日後の対局を勝利すれば、29連勝

で連勝記録を塗り替えるという大事な対局

なんだよ」

曇り顔の龍也。

雪竹「ちなみに28連勝もすごいけど」

龍也「(嫌そうに)無敗なんですよね」

雪竹「おー、調べてるね。感心感心」

龍也「仕事なんで」

雪竹「さすがだ。じゃあ、マストで取材して

欲しい内容を伝えるからメモして」

×

×

×

龍也はリュックを背負って立って、紙
を見ている。

紙には『スケジュール表』と書いてあり、大阪での行動スケジュールが記載されている。

雪竹「それでアポ取ってるから、この通りに取材して」

龍也「あの、これって僕以外に行ける人いないですよね」

雪竹「そうだね。ゴールデンウィーク前だから激烈にやる事があるもんで。不服？」

龍也「いや、そういう訳じゃないんですけど」

雪竹「とりあえず経験だから。社会人なんてこんな事の連続なんですよ。いつまでも学

生気分じゃやってけないって事ですよ」

龍也「はい…」
ボイスレコーダーと新幹線のチケットを渡す雪竹。

雪竹「じゃあこれ往復の新幹線のチケットとボイスレコーダー。重要な質問の回答は全部これで録ってきて。こっちで編集するか」

無言で受け取る龍也。

雪竹「それでは行ってらっしゃい！」

しぶしぶエレベーターへ向かう龍也。

○同・入り口

龍也が出てくる。ビルの日陰側で、壁にもたれかかる。

龍也「なんであいつなんだよ」

スマホを取り出して、メモアプリで

『大手企業採用状況』というメモを開く。

メモ「新宗社（採用） ユニックスコーポレ

ーション（4月中結果発表）竹中商事（4

月中結果発表）」

目をつぶり、悩む龍也。

スマホにメールが来る。母からだ。

幸恵（メール）「大阪出張頑張っておいで☆

明日の結果は連絡するので安心してね」

しばらく画面を見つめる龍也。

×

×

×

(フラッシュ)

集中治療室の中で横たわっている幸恵

(46)。

× × ×

ため息を吐き、意を決したように歩き出す龍也。

○新大阪までの新幹線

新幹線が走っている。

× × ×

席に座り、ポーツと一点を見つめる龍也。

× × ×

腕を組んで悩んだように眠る龍也。

○大阪の観光名所

道頓堀や、大阪駅周辺、梅田などの観光名所。

○関西将棋会館・外観

関西将棋会館。

入口前でスマホを手に、将棋会館をみあげている龍也。

龍也「ここか」

○同・1階

入ると、右手に将棋の指南書などの書籍が販売されており、『月刊将棋』という本に、『小浜4段の快進撃が止まらない』という特集が組まれている。むっとして早足で階段へ向かう龍也。

○同・3階受付

龍也が入ってくる。受付には誰もいない。

ベルを鳴らす龍也。すると、受付のおばちゃん(43)が歩いてくる。

受付「こんにちは。どうされました?」

龍也「新宗社の青柳と申します。」

受付「あー、新宗社の方ね」

龍也「小浜棋士に取材をさせていただくので
すが」

受付「はいはい、えーっと小浜先生と専務が
4階の和室にいらっしゃいます」

小浜先生という言葉に反応する龍。

龍也「何時頃がご都合よいでしょうか」

受付「大丈夫ですよ。ご案内します」

スタスタと歩き出す受付。

龍也「いえ、お話が終わったあとでも」

受付「大丈夫ですよ。ご案内します」

早足で歩く受付。

ため息をついて、後を追う龍也。

○同・和室前

和室のドアをノックする受付。その後
ろに龍也がいる。

受付「失礼します」

扉を開けると、燈馬と将棋連盟専務で
ある、立花（55）が座っている。

受付「新宗社の方がお見えになりました」

龍也が和室へ入る。

龍也「失礼します」

ギョツと目を見開く燈馬。

引きつった笑顔で会釈をする龍也。

龍也「本日から3日間、小浜棋士に密着取材を敢行させていただく、新宗社の青柳龍也と申します。よろしくお願いいたします」

燈馬は固まっている。

立花「(固まっている燈馬を見て)小浜くん」

小浜「あ、よ、よろしく願いしまっす」

立花「初めまして、将棋連盟専務の立花と申します」

立ち上がり、名刺を龍也に渡す立花。

龍也「すみません、本日名刺を持ちあわせておらず」

立花「お気になさらないで下さい。それより、将棋界期待のホープをよろしく願いしますね」

燈馬をちらりと見る龍也。

ビクリとする燈馬。

龍也「はい」

立花「この後は松林のところで研究会かな？」

燈馬「は、はい。将棋を指します」

立花「（笑いながら）そうか。じゃあ、3日後の対局期待しているよ。連勝記録更新の
後、一番だ。（龍也に）それでは失礼します」

お辞儀をする龍也。

立花が部屋を出て行く。扉が閉まったのを見届け、龍也があぐらをかいて燈馬の前に座る。

龍也「よう、小浜。この前ぶりだな」

燈馬「お、お久しぶりです」

龍也「この前ぶりって言ってんだろ」

燈馬「す、すいません」

龍也「調子にのんなよ」

燈馬「はい」

龍也「こっちは仕事だ。新宗社に内定が決ま
っていきなり密着取材を任された。分かる
か」

燈馬「はい」

龍也「社会人としてやる事をやる。分かったか」

燈馬「はい」

龍也「じゃあこの3日間、俺が聞くことには簡潔に答えろ」

燈馬「はい」

龍也「じゃあ、まず研究会ってなんだ」

○同・3階・廊下

棋士室入り口に『松林研究会使用中』と書いてある。

○同・棋士室

ロッカー室のような部屋で、10人の棋士が1つの盤を覗きこんでいる。

燈馬も頑張って覗きこもうとしている。服装が全員ださい。

龍也は少し離れて、メモを手に、啞然としている。

棋士A「それじゃあこの手は悪手ですね」

棋士B「でも102手目の銀打ちで効いてきますよ」

棋士C「たまたまだろ。明らかにこの手で敗勢となってる」

棋士D「この時点では先手有利でしたからね」

棋士E「じゃあこれはやはり悪手という事で」

燈馬「あ」

全員が燈馬をギロリと見る。

燈馬「あ、いや…」

にやりとしている龍也。

燈馬「え、えと、この手がなければ四四角で

七六金、三八龍、七八銀、六六歩、九四歩、

六七桂、七八銀、同金となり、先手必至で

す」

全員沈黙。

棋士A「た、確かにその後（急いで盤を動か

しだす）これで詰みだ」

全員「おおー！」

驚く龍也。

棋士A「お前何手先まで読んでるんだ」

棋士C「あの手が詰めるだったとしたら…小
浜すごいな！」

燈馬「い、いや、詰めるだったので…」

棋士A「それを凄いつて言ってんだよ」

燈馬を叩く棋士A。

棋士B「対局する時が怖いですよ」

嬉しそうな燈馬。

それを見る龍也。

○同・玄関（夜）

背伸びをしている龍也と、燈馬が出て
くる。

龍也「よくあんな部屋で5時間もやってんな」

燈馬「いつもは、もうちよつと長いです」

龍也「まじかよ。頭おかしくなるわ」

燈馬「すみません」

リュックからスケジュール表を取り出
す龍也。

夕飯をともにするという内容がスケジ
ューリングされている。

龍也「そうだった」

あからさまに嫌そうな顔をする龍也。

龍也「飯は好み焼きにするぞ」

燈馬「はい」

嬉しそうな燈馬。

○お好み焼き店・店内（夜）

龍也と燈馬が向かいあって座っている。

龍也はビール、燈馬は緑茶を飲んでい
る。

ジューっと店員がお好み焼きを焼いて
くれている。

キラキラした目で店員の手さばきを見
ている燈馬。

店員「それではこのまま5分お待ちください。

その後はひっくり返していただいてまた5
分お待ちいただければベストです」

龍也「はい。ありがとうございます」

店員が席を離れる。

燈馬はお好み焼きに釘付けである。

龍也「ガキかよ」

燈馬「え？」

龍也「え？じゃねえ」

燈馬「え？」

龍也「お前舐めてんの」

燈馬「な、な、なめてないです！ すみませ
ん」

ため息と吐く龍也。

龍也「（メモを取り出し）今から聞くの取材
な。はい、いつも対局前日は何食べてんの」

燈馬「いつもはコンビニ弁当です」

龍也「（メモしながら）コンビニ弁当かよ。」

カツ井とか食いに行けよ」

燈馬「注文するの苦手なので」

笑う龍也。

龍也「お前一人でご飯食べに行けねえの？」

燈馬「はい」

龍也「なんだそりゃ。お前将棋以外何もでき
ねえのな」

燈馬「将棋だけできればいいです」

むっとする龍也。

龍也「うるせえよ」

燈馬「（怯えて）す、すいません」

龍也「はい、次。将棋はいつから始めたの」

燈馬「えっと、中学1年生です」

龍也「（メモしながら）あー俺が将棋盤学校に持って行ってた時か」

燈馬「はい。あの時から将棋を始めました。

龍也くん強かったな」

龍也「お前人を馬鹿にする天才だな」

燈馬「い、いや、そんなつもりはないです。

本当に強かったです」

龍也「もうそんな事やった事すら忘れたわ」

燈馬「龍也くんに最初2回負かされました」

龍也「お前よく覚えてんな。気持ち悪」

燈馬「今まで負けた対局は何度も研究しているので、全ての指し手を記憶しています」

龍也「うえ。マジで気持ち悪」

燈馬「（嬉しそうに）でも龍也くんにはその後5回指して全勝してます」

龍也「（殴りかかろうとする龍也）お前まじ
でぶっ飛ばすぞ」

燈馬「（怯えて）すみません！」

龍也「余計な話すんな」

燈馬「はい」

お好み焼きを見る龍也。

龍也「5分経ったか？」

燈馬「5分？」

龍也「お前なんも話聞いてなかったのかよ」

ぽかんとしている燈馬。

龍也「お前の脳スペース将棋にしか使えねえ
のかボケ」

龍也だけ、お好み焼きをひっくり返す。

○同・店前（夜）

龍也と燈馬が店から出てくる。

店員（声）「まいどおおきにー」

ちようど来たタクシーを止める龍也。

龍也「じゃあ明日9時に将棋会館な」

燈馬「はい」

嬉しそうな燈馬。

龍也がタクシーに乗り込み、発進する。

○タクシー・車内（夜）

ふと後ろを見ると、燈馬がずっとタクシーを見ている。

龍也「気持ち悪い」

龍也、インタビューメモををポケットから取り出す。

それを見て真剣な表情な龍也。

メモには『勝利への執着心』と乱雑に書いてある。

その横には『気持ち悪い』とも書いてある。

メモを数ページ戻すと、バンドを組んでいた時のメモが書かれている。

その中に、大きなバツ印で消されているページがある。

そこには、『ジャパンレコード全国オーディション』、その下に大きく『絶

対合格！』と書かれている。

日付は4月20日となっている。

メモを閉じ、窓から空を眺める龍也。

○将棋会館・多目的室

燈馬、ホワイトボードの前に立って、

15人程度の小学生低学年の子どもたち
に駒のイラストなどを盤上で使い、
将棋の駒の動きを教えている。

燈馬から少し離れた場所でメモを持つ
て龍也が立っている。

燈馬「この飛車という駒は、普通でもつよい
んですけど、相手の陣地に入ると、龍にな
ってもっと強くなります。えっと無敵です」

生徒A「小浜先生！　なんで相手の陣地に入
ると龍になるんですか？」

燈馬「それは、えっと…」

沈黙。

生徒A「小浜先生！　なんでですか」

燈馬「えっと…」

どうしようもなくなり、龍也を見る燈馬。

生徒達も龍也を見る。

龍也「なんだよ」

生徒A「（龍也に向かって）先生！ なんですか」

龍也「いやいや」

龍也を見つめる生徒たち。

燈馬も見つめている。

龍也「まじかよ」

堪忍したように、ホワイトボードの前に立つ。

龍也「お前らポケモンやった事あるか？」

生徒全員「ある！」

龍也「じゃあ、それと一緒に。相手の陣地へ行くと、経験値がたくさんもらえて、別のポケモンに進化するんだ」

生徒B「なんで経験値がいっぱいもらえるの？」

龍也「相手の陣地に入るとはめちやくちや

難しい事で、ポケモンも強い敵を倒すとた
くさん経験値がもらえるだろ？ それと同
じだ」

生徒B「おー！ じゃあ相手の陣地にたくさ
ん入れればいいんだ」

龍也「そういう事だ」

納得する生徒たち。

燈馬も感心して頷いている。

そんな燈馬の頭をはたく龍也。

龍也「お前しつかりやれ」

燈馬「龍也くんありがとうございます！ こ
んなに納得してるみんな初めてです」

龍也「お前が下手くそなんだよ」

生徒A「先生次はなんですか？」

燈馬が龍也を見る。

龍也、燈馬の頭をはたき、

龍也「お前だよ」

燈馬「じゃ、じゃあ対局してみよう！ 駒を

並べて」

生徒全員「はい」

龍也「大体大丈夫なのかよ。対局明後日なのにこんな事やって」

燈馬「はい。自分の研究は寝る時間を使えばいいだけなので。子どもたちが1人でも多く、将棋を好きになってくれると嬉しいです」

子どもたちを笑顔で見つめる燈馬。

その横顔を真剣な表情で見つめる龍也。

龍也「でも教えるならもっとうまくやれよ。」

これじゃほとんどのやつが将棋やめるぜ」

燈馬「え！ そうなんですか！」

呆れる龍也。

龍也のスマホが鳴る。

慶からの電話である。

○同・同・廊下

多目的室から出てくる龍也。

電話を受話する。

龍也「もしもし。どうした？」

○河川敷

龍也が河川敷に座って電話している。
隣にはギターがある。

慶「たっちゃん、忙しいとこ申し訳ない」

龍也（声）「なんだよ」

慶「去年の今頃さ、いつもの河川敷で、明後日のジャパンレコードのオーディション出ようって言ってたじゃん？」

龍也（声）「（無言）」

慶「実は俺、今も毎週水曜日はその河川敷行つててさ。何度も諦めようと思ったし、たっちゃんに迷惑かけるのだけは止めようと思ったけど。やっぱり、やっぱりどうしても諦められなくて」

× × ×
神妙な表情で電話している龍也。

× × ×
慶「たっちゃんが就職しなきゃって思ってる理由もわかる。でもさ、それでいいのかな。好きな事やめる理由になるのかな」

答えを待つ慶だが、返答はない。

慶「最後でいいからさ。明後日のオーディションだけ一緒にでない？ いや、出たくれ！ 頼む！ たっちゃんじゃないとダメなんだ！」

祈る慶。

龍也（声）「明後日も仕事だから。じゃ」

慶「俺会場で待ってるから！ 15時！ 待ってるから！」

話の途中で電話は切れている。

携帯の画面を見つめる慶。

× × ×

無表情な龍也。

少し目をつぶり、その場を後にする。

○同・入り口（夕）

燈馬と龍也が出てくる。

スケジュール表を見る龍也。

龍也「今日はこれで終わりだな」

燈馬「はい。ありがとうございました」

龍也「帰って研究か？」

燈馬「はい」

龍也「本当に将棋だけしかやってないな」

燈馬「大好きな事なので」

無言になる龍也。

燈馬「（怯えながら）な、何か悪い事言った
でしょうか」

龍也「じゃあ、また明日な」

燈馬「は、はい」

歩き出す龍也。

○ビジネスホテル・全景（夜）

○同・室内（夜）

龍也がベッドにうつ伏せに寝ている。

× × ×

（フラッシュ）

慶「頼む！ たっちゃんじゃねえとダメなん
だ」

× × ×

仰向けになり、スマホを取り出して携帯を見る龍也。

母からメールがきていない。

龍也（メール）「結果どうだった？」

と、送信する。

そのまま目をつぶる龍也。

○（回想）病院・集中治療室（夜）

集中治療室内で横たわる幸恵（46）。

集中治療室の外で呆然としている龍也

（20）。

龍也、手に持っているギターケースを床に落とす。

○（回想終わり）

仰向けの状態の龍也、目を開き、深呼吸

吸する。

○溝の口病院・院内（夜）

真っ暗な病院の受付で幸恵の携帯が鳴

る。

『メール受信 龍也』と表示されている。

○天気の良い空

小鳥がさえずっている。

○ビジネスホテル・室内

龍也が寝ている。

パツと目を開き、

龍也「やばい」

○将棋会館・入り口（朝）

タクシーが停車すると、勢いよく龍也が出て、将棋会館へ入っていく。

○同・5階・和室

燈馬が和室で将棋を一人で指している。階段を駆け上がってくる音。扉を開けて龍也が入ってくる。

燈馬「あ、龍也くん」

龍也「（息切れ）コメント録り終わった？」

燈馬「はい。終わりました」

龍也「まじかよ」

落胆する龍也。

燈馬「どうしたんですか？」

龍也「（息切れ）コメント録りの前に聞けっ

て言われてた質問があんだよ」

燈馬「じゃ、じゃあ、今言いましよるか？」

龍也「は？」

燈馬「コメント録り前の心境」

× × ×

和室に龍也と燈馬が座っている。

龍也「本当の事言えよ」

燈馬「本当です。何も考えてないです」

龍也「何も考えてないわけないだろ」

燈馬「相手の戦法をある程度研究したら、自

分の好きな戦法をいつも通り研究します」

龍也「相手の戦法に合わせて、対策したりす

んだろ？」

燈馬「自分の好きな戦法で戦うって事しか考
えた事ないです。そ、その方が楽しいので」

怪訝な表情で燈馬を見る龍也。

龍也「お前のそのバカ思考が羨ましいぜ」

燈馬「（嬉しそうに）え！」

龍也「皮肉だ。分かれ」

燈馬「すみません」

落胆する燈馬。

立花（声）「失礼」

立花が扉を開けて部屋を覗く。

龍也に会釈する立花。

龍也も会釈する。

立花「小浜くん。ちょっといいかい」

燈馬「はい」

部屋を出ていく燈馬。

龍也、おもむろに盤の前に座る。

駒が並んでおり、歩をかつこつけてパ

チンと指す。

その瞬間に、燈馬のスマホに続けざま
に2通メールがきて驚く龍也。

燈馬の母からだ。

メールの中身が少し見える。

燈馬母（メール）「明日の対局がんばりなさ

いね」

燈馬母（メール）「でも負けたら、約束はし

っかり守ってもらいますからね」

龍也「約束？」

燈馬が部屋に戻る。

慌てて燈馬のスマホから目をそらす龍也。

燈馬「すみません、話の途中で」

龍也「別にいいよ」

龍也、燈馬の携帯を見やり、

龍也「母ちゃんからメール来てたぞ」

燈馬「あ、そうですか」

スマホを見ようとしないう燈馬。

龍也「なんかあんのか？ 母ちゃんと」

燈馬「（無言）」

龍也「別に見る気はなかったんだけど、見えちゃったんだよ」

龍也を見る燈馬。

龍也「約束ってなんだよ」

うつむく燈馬。

龍也「別に取材でもなんでもねえ。答えろ。

命令だ」

燈馬「（顔をあげて）僕の両親は、僕が将棋
やってる事を良く思っていないんです」

やっぱりな。という表情の龍也。

龍也「それで」

燈馬「お父さんもお母さんも学校の教師で、
高卒すらしていない僕が信じられないよう
で」

龍也「約束ってもしかして」

燈馬「僕が1度でも負けたら、将棋をやめて
学歴を取りなおすという約束です」

龍也「なんでだよ。もう十分結果出してるじ
やねえか」

燈馬「それでも、僕が将棋をやめる事を望ん
でいます」

龍也「そんなアホな……1度も負けないなん

て無理だろ」

燈馬「無理です」

龍也「じゃあどうすんだよ」

燈馬「別に気にしてません。結局将棋続けますので」

龍也「へ？」

信じられないという顔をしている龍也。

燈馬「誰にやめろと言われても将棋はやめません。好きなので」

愕然とする龍也。

龍也「お前誰だよ」

燈馬「こ、小浜燈馬です」

笑い出す龍也。

龍也「（笑っているが悲しげに）なんだよそれ」

○お好み焼き屋・店内（夜）

ジューっとお好み焼きが焼かれている。

龍也と燈馬が先日と同じ席に座っている。相変わらず、龍也はビール、燈馬

は緑茶である。

燈馬「い、いいんですか？ スケジュールに
なかったですけど」

龍也「お前こそいいのかよ。対局前日にこんな事してて」

燈馬「（嬉しそうに）はい」

龍也、メモの用意をする。

龍也「明日、戦法は何でいくんだ？」

燈馬「明日は棒銀です」

龍也「棒銀？ そんな基本的な戦法で大丈夫なのかよ」

燈馬「はい。棒銀、好きなので」

龍也「好きで勝てるのはお前くらいだよ」

燈馬「僕、銀が好きなんです。金より攻撃的で、でも防御もできる」

龍也「俺みたいか？」

燈馬「いえ、龍也くんはもっと凄いです！」

大きな声に周りが反応する。

龍也「バカ。うるせえよ、（周りをキョロキョロと見る）冗談だし」

燈馬「龍也くんは龍です。前にも後ろにも横にも斜めにも動ける。完璧です」

龍也「（悲しげに）完璧なんかじゃねえよ」

燈馬「完璧じゃないです」

龍也「どっちだよ」

燈馬「ええと、なんというか」

考えこむ燈馬。

龍也「はいはい、もういいよ」

燈馬「すみません」

龍也、スマホで時間を確認。

龍也「5分だ」

お好み焼きを素早くひっくり返す二人。

○同・店前（夜）

龍也と燈馬が店から出てくる。

店員（声）「まいどおおきにーまたきてや」

龍也、扉を閉める。

龍也「次はいつになるかな」

燈馬「また来たいですね」

龍也「お前はこれるだろ」

燈馬「いやー……」

龍也「（鼻で笑って）じゃあ、明日な。頑張れよ」

燈馬「はい！ あれ、歩いて帰るんですか？」

龍也「この前タクシー乗ったらすぐだったから。今日は歩いて帰る」

燈馬「そうですか」

龍也「じゃあ、明日な。頑張れよ」

燈馬「はい！ 将棋します！」

龍也「なんだそれ」

それぞれ別方向に歩き出す龍也と燈馬。

○ホテルへの帰り道

車が行き交う大きな通りである。

歩道を龍也が歩いている。

× × ×
(フラッシュ)

燈馬「別に気にしてません。結局将棋続けますので」

× × ×

ふと笑みを浮かべ、メモを取り出す龍也。

メモには燈馬の事が乱雑に書かれてあり、いくつかのワードが赤丸で囲まれている。

『勝利への執着心』

『自分の為に生きる』

『信念』

メモを見て、深くため息をつく龍也。

龍也「俺にとっちゃ、お前の方がよっぽど龍だよ」

龍也、スマホを見る。

母からのメールを確認するが、未だに返信が来ていない。

電話をかける龍也だが、『おかけになった電話は——』となる。

龍也「なんでだよ」

○将棋会館・入り口（朝）

人が入口前でたくさんしゃべっている。

龍也が会館に入ると、人の多さに驚く。
将棋ファンが売店のあちらこちらで将
棋の話をしている。

ファンA「小浜4段、今日も勝ちそうだな」
にやりとしながら1人頷く龍也。

ファンB「でも小浜4段って運強くないか？」
ファンA「運？」

ファンB「まだ強い相手ともあたってないし、
相手も毎回決まって悪手を指してる。ミス
さえしなきゃ」

龍也が話に割って入る。

龍也「心配しなくても、今日も勝つかから安心
しろ」

慄くファンB。

○将棋会館・棋士室

棋士室に人があふれる程入っている。

龍也「すげえな」

廊下の奥で立花が手招きしている。

立花「青柳さん！ 巻きで対局前会見が始ま

ります！ いらしてください！」

龍也走って立花のもとへ。

立花「（階段の上を指さして）5階です」

龍也「ありがとうございます」

○同・和室

和室に龍也が入ると、記者達が部屋いっぱいに座っている。

奥に大きな屏風が立っている。

龍也は後ろの隅に立ってメモを取り出す。

立花も遅れて入ってきて、龍也の横へ位置取る。

立花「こんな事は異例です。普段来ない雑誌の記者がたくさんいらっしやってます」

燈馬のスマホのバイブが鳴る。

取り出すと、慶から、

慶（メール）「待ってるから」

と、メールが来ている。

しばらくスマホを見つめている龍也。

受付のおばちゃんが出てきて会場がざわつく。

スマホをポケットへしまおう龍也。

受付「それでは、小浜4段に登場してもらいますが、いつもどおり、質問は10個まで、小浜4段が答えられないと判断したら、私が答えます。いいですね」

笑う記者達。

受付「じゃあ小浜4段、お願いします」

おどおどとした燈馬が屏風の裏から登場する。

燈馬「みなさん、本日はおこしいばらぎ、あつ、えつ、いばらきだ、あつ、そこじゃない」

爆笑する記者達。

龍也も笑っている。

受付「それではこんな感じなので、挨拶はさておき、質問をどうぞ」

一斉に手を挙げる記者達。

受付「はい。(手で示して)ではそのあな

た」

記者A「本日はずばり勝てそうですねですか？」

会場中の視線が燈馬に集まる。

燈馬「え、えと……対局ができるという事しか、考えた事がなかったです」

会場が沈黙する。

思わず笑い出しそうになる龍也。

記者A「（慌てて）で、では本日の」

受付「（手で制して）質問は1人1問まで。

それでは次の方」

再び一斉に手が挙がる。

受付「では（手で示して）そのあなた」

記者B「本日の戦法は居飛車ですか、振り飛車ですか？」

突っ込んだ質問にざわつく会場。

戦法という言葉に何かを考えだす燈馬。

受付「そのような質問は」

燈馬と目があう龍也。

燈馬「あ」

再び会場が沈黙する。

燈馬「龍は完璧ではないと言った理由は」

会場中がハテナに包まれる。

龍也だけは、目を見開いて何を話すかを感じ取っている。

受付「小浜4段」

燈馬「大丈夫です」

燈馬の真剣な表情に、何も言えない受付。

燈馬「龍は敵陣だと自由に攻める事ができて、とても優秀なんですけど、自陣では味方がたくさんいて、せつかくの動きが役に立ちません」

聞き入っている龍也。

燈馬「でも、仲間が先陣を切ったり、道を開けてくれたりして、敵陣へ入り込めば、龍は無敵です。そういう意味です」

沈黙の会場。

受付「以上が、小浜4段の持論という事で、伝えたかったそうです。どうしても」

ざわつく会場。

何かをこらえる龍也。

龍也のスマホのバイブがなる。

母からのメールである。

背景では、燈馬に再び質問が始まって
いる。

母からのメールを開く。

母（メール）「携帯を病院に忘れてしまった
いました。心配させちゃったかな？」

安心したように息を大きく吸い込む龍
也。

メールを下へスクロールすると、メー
ルに続きがある。

母（声）「今、龍也はとても私の事を心配し
てくれているという事が日々、母さんには
伝わります。とても嬉しいと思う反面、龍
也の選択肢を狭めてしまっているのではな
いかと、とても心が苦しくなります。あな
たは、私の誇りです。もし、あなたが今母
さんの為に何かを捨てているのならば、そ
れは母さんの為ではありません。あなたが

したい事をして下さい。それが母さんにと
っては1番の幸せです」

メールを読みながら涙があふれだす龍
也。

龍也、涙をふいて、燈馬を見る。

龍也「燈馬、ありがとう」

急いで会場を後にする龍也。

その姿を見ている燈馬。

○同・外観

龍也が勢いよく出てきて、タクシーを
止める。

○タクシー・車内

龍也が乗り込み、

龍也「新大阪駅まで、急ぎでお願いします！」

運転手「へ、へいよ！」

スマホで新幹線の時間を確認する龍也。

1 1時50分の新幹線に乗れば、14
時23分に東京に着く。

スマホの時計を見ると、時刻は11時30分。

龍也「おじちゃん、45分までに新大阪行つて！」

運転手「45分！？」

祈る龍也。

○新大阪駅・入り口

時刻は11時46分。

タクシーが早い速度で停車する。

扉が開くと龍也が出てくる。

龍也「おじちゃん、マジであります！」

運転手「へいよ！」

走ってホームへ向かう龍也。

○同・ホーム

東京行きの新幹線が止まっている。

アナウンス「東京行き、のぞみ224号発車致します」

龍也が走ってきて、ぎりぎりで乗り込

む。

○新幹線・車内

入り口のドアにもたれかかるように座り込む龍也。

龍也「（息切れ）間に合った……」

× × ×

ドア付近で立ってスマホを見ている龍也。

車内アナウンス「もう間もなく、終点、東京。

終点、東京です」

スマホの画面には、東京駅から青山一丁目までの電車経路が表示されている。到着時刻は14時47分となっている。

龍也「行ける」

新幹線が停車し、扉が開く。

急いで降りる龍也。

ホームの電光掲示板の時計は、14時25分を指している。

○東京駅・丸の内線ホーム

電車を待つ龍也。じっとしていられない。

ひっきりなしにスマホで時間を確認する。

スマホの時刻は、14時32分。

電車がホームに入ってくる。

○赤坂見附駅・銀座線ホーム

電車の発車音が鳴っている。

エスカレーターを1段飛ばしでおり銀座線にギリギリで乗り込む。

○乗車した電車内

へとへとな龍也、優先席に座ろうとする。

しかし、後ろに妊婦さんがおり、なくなく席を譲る。

○青山一丁目駅・ホーム

スマホを見ながら降りてくる。

グーグルマップには徒歩20分と書いてある。

時刻の表示は11時47分。

龍也「走れば行ける」

駆け出す龍也。

○ジャパンレコード・外観

大きなビル。

看板には、『JAPAN RECORD COMPANY』と書いてある。

慶がギターケースを2つ持って入り口前で待っている。

真剣な表情で門を見つめる慶。

○同・付近

龍也、走っている。そして立ち止まる。

ジャパンレコードの看板が見える

龍也「あった」

○同・入り口前

入口前で待っている慶。

龍也が走って入ってくる。

驚く慶。

慶「たっちゃん！」

駆け寄る慶。

龍也「ごめん。待たせたな」

慶「100年待った！」

笑う龍也。

龍也「よし、行こう！」

走って建物内に入っていく龍也。

壁にかかっている時計の時刻は、15

時3分。

○同・オーディション受付

片付けを始めているスーツ姿の男女2人。

廊下をかけてくる龍也たち4人。

龍也「すみません！ エントリーまだ間に合いますか」

受付男「受付は終了しました」

慶「なんとか受けさせてもらえませんか」

受付男「すみません。できません」

慶「お願いします！」

頭を下げる慶。

それを見て龍也も頭を下げる。

受付（声）「すみません」

慶「そんな、まだ」

今村（声）「お！ 龍也じゃん。久しぶり」

龍也が振り返ると、今村と今村のバン

ドメンバー達3人がいる。

龍也「今村。お前らも今から受付か？」

今村「あ、入れなかった感じ？」

龍也「そうなんだよ。なんとか入れてもらお

うぜ」

今村「えっとね」

少し間をおいて、

今村「俺らゲストだから受付じゃない」

笑う今村たち。

何も言えない龍也と慶。

今村「てかさ、やめたんじゃなかったの。ジ
ュブナイルロック落ちてさ」

慶「お前ら」

怒っている慶。

怖がったフリをしている今村。

龍也「あのさ！」

全員が龍也を見る。

龍也「お前らの力で、なんとか受付通しても
らえねえかな」

今村「いやいやそんな簡単に、はいいいよと
は言えないでしょ。ねえ」

笑う今村達。

下を向いている龍也。

そして突然土下座の体勢になる。

今村「え」

龍也「（頭を地面につけて）お願いします。
やらせてください」

受付を含む、その場にいる全員が驚き
の表情で龍也を見ている。

慶「たっちゃん！」

膝をついて、龍也の顔をあげようとする慶。

驚いている今村達。

龍也「頼む！」

今村「（周りのメンバーや受付をキョロキョロ見て）ま、まあ、そこまで言うなら別にいいんじゃない」

龍也「（顔をあげて）まじか。本当にありがとう」

今村「お、おう。（受付女を見て）なんか言われたら、俺らが通したって言っていないで」

受付女「あ、はい」

今村「じゃ、じゃあ、頑張って」

会場に入っていく今村達。

龍也、立ち上がり、

龍也「やったな！」

慶「たっちゃん……」

泣きだす慶。

龍也「なんだよお前、泣くなよ」

慶「（泣きながら）だって、だって」

龍也「なんで泣いてんの？　どういう事？」

慶「（泣きながら）しよ、しよーゆー事」

笑う龍也。

龍也「慶」

慶、龍也を見る。

龍也「ありがとな！」

慶、再び声をあげて泣き出し、龍也に

抱きつく。

笑う龍也。

龍也「じゃあ行きますか！」

慶「おう！」

龍也、スマホのバイブがなり、立ち止

まる。その間に、慶が会場に入って

いく。

龍也、スマホを見ると、カレンダーア

プリのアラートがあがっている。

『小浜 対局開始』と書いてある。

にやりとする龍也。

龍也「よし！」

龍也、会場に入り、扉を閉める。